

故郷・美濃でイチゴ実る 今季初栽培の「美濃娘」出荷

40代大矢さん、夫婦でUターン就農



イチゴを収穫する大矢的充さんと実希子さん＝美濃市生櫛

美濃市さくらヶ丘出身の大矢的充さん(46)は地元でUターンし、新規就農した。今季初めて栽培したイチゴの「美濃娘」は、先月から本格的に出荷が始まった。大矢さんは「良いイチゴができた」と自信を見せる。

(佐名妙予)

大矢さんは高校卒業後、品開発などを担ってきたが、県外の大学の農学部に進学。大学院を経て、愛知県の製菓メーカーに就職。商

「いつか地元に戻りたい」という思いがあった。3年ほど前に帰郷を決意し、新

たな仕事を模索する中、就農セミナーに参加し、進みたい道が見えた。自分で何かを作るのが好き。最初から最後まで自分でできる」と農業を選んだ。妻の実希子さん(40)も賛同した。

1年間、岐阜市のJA全農岐阜のいちご新規就農者研修所で栽培技術をみっちり学び、独り立ち。複数ある品種の中でも、味が濃く、地元の「美濃」の文字が入った「美濃娘」を栽培することにした。

同市生櫛のハウス5棟(約1800平方メートル)を使って栽培し、高さ約1メートルの高設栽培の苗床がずらりと並び、苗床には10種類以上の肥料を配合した養液を与え、たっぷりと甘みを蓄えた実ができる。

収穫作業などは、実希子さんや大矢さんの両親も加わり、家族ぐるみで取り組む。今季は5月末までに約10トンの収穫を見込む。すでに市内外のスーパーなどで

販売されている。自身の就農までを振り返り、「さまざまな支援を得られた。もし、就農に興味

がある人がいれば、ぜひ始めてほしい」と、市の農業人口や新たな仲間が増えることを期待する。